

# 進撃のサキュバス

attack on Succubus



シナリオ：オパイ  
フリックリーク

挿絵：ダツマ69



## 一、降臨

大陸における諸国家の中で、フランク王国は中堅よりの大国とされる。ただし国境を接する他国がいくつもあり、流通が盛んと言うメリットと引き換えに常に綱渡りの外交を強いられる宿命にあった。この為フランクの王族は他国の倍は忙しいと代々評され、それは現第一王子にして次期国王のルーンハルトも例外ではない。

王国の首都マインツの中心地にある宮殿は大きく豪華だが、内部を良く知る者は実はいくつかの見えにくい場所が質素である事を知っている。宮殿内の王族用住居に構えてあるルーンハルトの執務室もまた、入った事の無い者にはさぞかし立派だと思われがちだが、実際には贅沢品の類はほとんどない。むしろ壁全体が本棚に覆われているせいで手狭で、窓すらない閉塞感溢れる部屋である。

まさかそこまで王国は火の車なのか、殿下は贅を嫌う変人なのか、それともただ単に居心地の良い部屋だと怠けたくなってしまうのか……宮仕えの者達の勝手な推測を聞き流しながら、ルーンハルトは今日もこの部屋に籠もる。

せめてこれだけは、と家臣達に押し付けられたこの部屋では唯一豪勢と言える家具、金の装飾入りの椅子にピンと背筋を伸ばして座る彼の前には書類の山、山、山。今日はこれと格闘しつつ、半刻前行われた宮廷会議のやり取りをまとめあげなければならぬ。

「……………」

ルーンハルトの脳裏にはあの忌々しい会議の様子がこびりついていて、諸々の議題のうち、彼が強く主張したのは王国の秘宝「賢者の石」の取り扱いについてであり、これが若き王子の望みとは正反対の結論に向かつてしまったのが彼を苛立たせていた。

賢者の石。古代の偉大なる錬金術師が生涯をかけて作り出したと言われる、無限とも思われる魔力が宿る石である。その力を正しく引き出せば石ころを黄金に変える事も、人が不老不死になる事も、巨竜を一瞬で死にいたらしめる事も、神々の叡智を得る事も出来ると言う。

ただし力の引き出し方の知識は失われており、現状では何の役にも立たない代物。それどころか賊に狙われ、他国に言いがかりをつけられる事実上の疫病神ではないか。かと言って他国に渡すのもうかつに壊すのも恐ろしいから、辺境の農村にこっそり隠し、賢者の石などただの



迷信、そんな物はこの国には存在しないと言い張るのが一番だ……

それが代々の決まり事であり、今回の会議も「相変わらず、そんな物は存在しない」と儀礼的に論じるだけの為の場だった。ルーンハルトはこれに異を唱えたのだが、結果は次期国王の主張とは思えない程無残な物だった。

「くそっ！」

ドン、と拳を机に振り落としても、怒りは少しも収まらなかった。若造が、まだ王ではないのに余計な事を……と書かれた臣下達と貴族達の顔が忘れられない。父である現王の「王たる者こそ伝統を軽視するな」と言う叱責も、母である王妃の「手柄を急がなくても良いのですよ」と言う微笑みも腹立たしくて仕方がない。

何が伝統だ、何が手柄だ！いずれこの大陸では覇権が争われ、大きな戦争が起きる。その時「賢者の石を寄越せ」と言う口実で攻め込まれるのと、自分達が賢者の石を使いこなしているのとは天と地ほどの差があるはずだ。平和を欲するからこそ戦に備えねばならないのに、自分が老いで消えた後なら国がどうなっても良いのか……！

ルーンハルトはしばし頭を抱え、侍者が手間をかけて整えた髪型をかき乱した。そうでもしなければ叫び出してしまいそうだった

「ふう……」

ため息をつくど、ようやく少し落ち着けた気がした。いつまでも怒りに身を任せていても、何も解決しない。今回の会議のやり方は何がまずかったのか、次の会議では何をどう言えば良いのかを考えねばならない。

ルーンハルトは若かった。冷静さを取り戻すには多大な意志力が必要だった。それに没頭してしまった結果、誰かが自分の後ろに居ると気付いたのは大きな影が机に現れてからだだった。

「うわあ!？」

完全に不意を突かれたルーンハルトは裏返った情けない声を上げ、ギョツとしながら振り返ろうとし、その弾みで椅子を後ろに傾かせてしまった。慌ててバランスを取ろうと両手をバタ

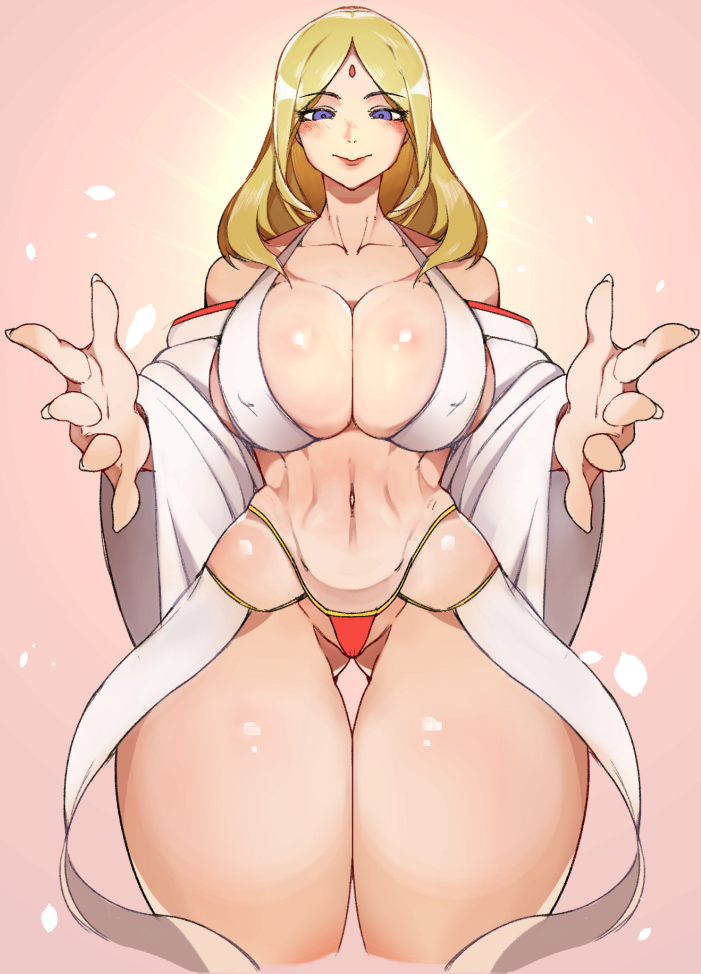
バタさせた約一秒の後、努力むなしく椅子は倒れ、彼の背中に鈍痛が走る。

「イツ！つつつ……」

本能的に自分の背中をさすると、目の前に手がスツと差し伸べられた。昔から従者に助けられるのが当たり前だったルーンハルトはそれを条件反射で握ったが、その瞬間、彼の触覚はしびれにも似た甘い何かに侵された。

「すまな、い……？」

その手は洗練された陶器の様に純白で、手触りの滑らかさと言えばまるで作り物の様。ルーンハルトは立ち上がって手を離すまで高貴な芸術品に触っている錯覚におちいり、もう一度触りたいと思ひながら視線を手から腕に、そしてその持ち主に動かし、彼女を見た。見てしまった。



甘い何かが今度は目を通じて、頭の中を隅から隅まで駆け巡った。

侍女か誰かだろうと思っていた突如入室してきた存在が一体なんなのか、ルーンハルトには理解できなかった。ただ一つの言葉が、感情が、概念が彼の意識を占めていた。

——美しい。

それ以外考えられなかった。やはり作り物としか思えない、一点の曇りもなく透き通る様な肌。太陽の光を糸にして束ねればこうなる、とばかりに輝く長い金髪。白い衣に中途半端に包まれた、人知が定めた黄金比などあざ笑えそうな肉感的な肢体。

恐怖すら感じそうなあまりに完成度の高い美を見てしまい、ルーンハルトは自分が幻でも見ているのではと疑った。目の疲れを取ろうとして眉間をつまみ、手で押して揉みほぐし、もう一度目をこらしてみる。

「大丈夫う〜？」

彼女は消えなかった。眩いばかりの荘厳な美しさに相応しい、聞くだけで耳を愛撫される様な美声と、それとは裏腹に子供の様な愛らしい口調がこれは幻ではないと彼に突きつけてきた。

ルーンハルトの理性が叫ぶ。何だ、この女性は何？と。

言うまでもなく、宮殿の内部は王国内で最も厳しく警備されている。ましてやここは、王族の居住地内の奥にある執務室だ。勤務中は火急の用以外では邪魔をするなど厳しく言い含めてあるが、扉のすぐ向こうにはメイドも警備兵もいるはず。こんな所になんら騒ぎを起こさず、見知らぬ人間が侵入する事などあり得ないのでは？

幻でなければ夢だろうか。こんな人間離れた美貌の持ち主が現世に居るとは思えないし、いつの間にか桃色の霧が部屋を満たしているのだから……いや、待て。桃色の霧？美女の夢なら分かるが、桃色の霧がそれと何の関係がある？

ルーンハルトがまともに考えられたのはそこまでだった。

「ん〜？」

人外の美を体現した女が近づき、整い過ぎた顔が間近に迫ると、甘美な芳香がルーンハルトの鼻腔を満たした。女性特有のふわりと漂う匂いとも、ツンとする香水の匂いとも違う、今まで嗅いだ事のない甘くて重厚な『フェロモン』というべき、男を惹きつける魔性の香りだった。

頭の中でまとめようとしていた思考が霧散し、形を失う。彼女がどうやってここまで来たのかはどうでもよくなり、心地よい脱力感が全身に広がっていく。張り詰めていた表情は幸せそうにゆるみ、膝が笑ったかと思うと足が滑り、気付いた時は床に膝をつけて立ち上がれなくなっていた。

「あれえ〜？怪我しちやった？」

「あ……あ……」

ルーンハルトは何も考えられなかった。まるで心臓を鷲掴みされた様に頭が動かなかった。ただ、感情はまだ自分の物だった。彼の中の何かが、おそらくは生物としての本能が言葉に出

来ない警告を叫んでいた。

距離が近すぎるのだ、しかし、距離を取ろうにも彼の身体はまるで言う事を聞かない。足は鉛の輪をつけられた様に全く動かさず、立ち上がる事など出来そうにない。せめて後ずさろうと手を動かしても、床を押す力すら足りない。

「ハッ……ハッ……ハフ……ハフ……」

何もしていないのに息は乱れ、全身から汗が噴き出ている。身体が熱病のごとく火照り、燃え上がる血潮が腰に集まり、股がズボンを浅ましく膨らませる。

「ハッ……ハッ……ハフ……ハフ……フハハハ」

犬のそれに似た必死の呼吸音が面白かったのか、目の前の女性は彼の真似をしておどけて笑った。バカにしていると受け取られても仕方ない行動だったが、彼女のいたずらっぽい笑みはあまりに無邪気で可愛らしすぎて、嫌悪感を持ってなかった。



一体彼女は何者なのだろう。ルーンハルトがもう一度思った時、彼女の表情は小悪魔の笑顔から天使の微笑みに変わった。どきり、と心臓が跳ねたかと思うとあのシルクよりもなめらかな手が彼の頬を優しく撫でていた。

「あ……」

ひんやりとした心地良さとふんわりとした温もりが同時に伝わり、息を漏らしてしまいそうな程の安らぎと頬が燃え上がりそうな興奮が矛盾なくすりこまれていく。頬に手を当てられ、にこにここと見下ろされている事が凄く幸せな事の様に思える。

ルーンハルトはその生まれゆえに誰かに見下ろされた事など数える事しかない。もちろん成長する前は大人達の視点は彼よりも高かったが、精神的にはほとんどの大人が彼の顔色をうかがっていた思い出ばかりだ。両親と他国の王族を除けば、彼は常に見下ろす側であり、それを当然の事と思っていた。

だが今、彼を見下ろす彼女はあまりにも美しすぎて、高貴すぎて、不快感などかけらも湧いてこなかった。それどころか、彼女には王族の自分でもそうされる事が当たり前……否、名譽

にすら思えた。彼女の側に居られる事自体が身に余る栄光であり、自分は望外の奇跡に見舞われたのだと思えなかった。

ルーンハルトは従属の喜びに目覚め、それと同時に彼女の正体に思い当たり、考える前に口に出していた。

「め……女神……様？」

彼女は女神ではないかと。天上に住まう神々の内の一柱ではないかと。見ただけで呼吸すらままならなくなってしまうこの圧倒的な「美」を表現するには、この単語しか思い浮かばなかった。ルーンハルトは自分が見た物以外は容易に信じない主義だったが、だからこそ人知を超越した存在感を見たことにより、強烈に認識してしまった。

「えっ？」

「女神」は一瞬だけ、少し驚いた様に見開き。

「そう……そうね。うん、私は女神。フレイアって言うの……」

天使の笑顔とさえずりに戻り、彼の推測を肯定した。ルーンハルトはそれに見惚れながらも、刹那だけ見せた奇妙な間は何だったのか考える。

「あ……フレイア……様」

「どうしたの？ “女神” を見るのは初めて？」

ひよつとしたら女神ではないのでは。急に女神という言葉を強調し始めたのは自分が勝手に勘違いしたのを都合よく後押ししただけなのでは。

「あ……あの……」

「ん？」

油断をつくように、女神が身体を寄せて上目遣いで覗き込んでくる。

(き……綺麗だ)

ルーンハルトはその透き通る瞳に自分の疑心を見透されるようで視線を逸らす。視線は吐息を漏らす縦皺の一切ないプルプルに潤った唇から、真っ白い首に落ちて、肉感的な弾力をもつ胸の谷間に吸い込まれていくと、だんだんと思考がぼやけていく。

「なあに？」

疑念はすぐに泡の様に消えた。彼女が女神でないはずがない、こんなに美しく優しい笑顔をしているのだから……ルーンハルトは当たり前の様にそう考え、ほんのわずかも彼女を疑った事を恥じた。

「い、いえ……」

一度屈した心はもつと良い言い訳を瞬時に思いつく。ひよつとしたら女神様は誰でも知っているような相当に有名な存在なのでは？それなのに、自分がその存在を知らなかったから驚か

せてしまったのでは？もしそうなら、自分はどれ程の非礼を働いてしまったのか、いかように詫びれば良いのか。考えるより早く身体が土下座の体勢を取っていた。

「申し訳ございません！」

「あらあら？どうしたの？」

「その……その……」

「何が申し訳ないのかしら」

「わ、私は……お……愚かにも、本当に女神なのかと一瞬疑いかけてしまいました。こんな……こんな……お美しいのに……愚かな私をどうかお許し下さい」

恐る恐るそのままの体勢で首を上げるルーンハルトの不安をよそに女神はプツと小さく息を吹き出すと口元を抑えクツクツと小さく笑いだした。

「これは思ったよりぜんぜん簡単そうね」

「え？え？あの……」

「ほら、立って」

女神様に手を取られ幸せな気持ちのまま身を起こそうとするが、足はぐらつき膝立ちの状態になってしまう。

「ふふ……目がトロンとしてるわよ？良いお気分？女神様を見て」

「あ……ああ……はい……凄い……」

自分よりはるか上にある存在との接し方などルーンハルトは知らないし、普段は速く回転してくれる頭もこの時ばかりは言うべき言葉をみつめてくれない。フレイアが怒りのきざしを見せない事を良い事に、謝罪よりも二度と見れないかも知れない絶世の美を瞳に焼き付ける事を優先してしまう。

「そう……そのままいい気持ちに浸って、リラックス……リラアックス」

「ああああ……」

フレイアはどんどんふぬけていくルーンハルトをとがめず、むしろ実に可愛いと言わんばかりに目を細めながら更なる墮落を促した。許しを得られた事でルーンハルトの顔はますます緩み、瞳は力なく曇り、夢見心地にされてしまう。

「あらあら、何てだらしない顔なのかしら。ふふふ……」

なんて寛大な……ああ、暖かい……フレイア様の後光に照らされるだけで身体まで春の日差しに温もりに満たされていく様だ……このまま時間が停まればいいのに、世界がこの一時だけで固まってしまえばいいのに……

ルーンハルトは酔っていた。絶対的な存在が自分と共に居てくれ、あまつさえそれを楽しんでくれていると言う事実が、どんな美酒でもたどり着けない領域の極楽に連れていってくれた。

その陶酔の境地は、今の自分が精通直前の少年の様に制御無く勃起している事にも気付かない程だった。

「落ち着いた？少しお話できるかしら？」

「は、はい……」

そんな彼でも、完全に知性を失っていた訳ではなかった。

「じゃあ、一つ聞きたい事があるの。教えてくれるかしら？」

「はい！な、なんでも……私が知り得る事なら、なんでも……！」

フレイアの言葉の糸通りに動く人形になりかけていた時に、彼女が発した一つの単語がルーンハルトを少しだけ現実に引き戻した。

「賢者の石についてだけど」



「!!」

賢者の石。つい先ほどまで彼を悩ませていた物。そして宮廷会議に出られる国の重鎮たち以外は存在すら誰も知らないはずの物。それを彼女が知っている。

「なぜ……?」

誰か口を滑らせたのだろうか。ルーンハルトがまだ王子であつて王では無い内に大臣あたりがなんとかしてしまおうと考えたのだろうか? 隠し場所を領地を含む貴族が厄介払いを願ったのだろうか? それとも、裏切り者ではなく間者が……? ?

しかし、ルーンハルトが頭を働かせられたのはほんの数秒だけだった。

「女神は何でも知ってるの」

包容力を感じさせる笑みを浮かべるフレイアは脳を撫でつける様な声で理屈になっていない

理屈を語った。もし第三者が彼女の姿を見ず、彼女の声を聴かず、文面だけで知れば即座に疑心を強めるであろうセリフだった。

「……………」

今のルーンハルトはそうではない。彼女の天上の美と、目に見えてきそうな優しさと、本能の奥底に訴えてくる官能が、女神様が言っているのならきつとそうなのだろうと思わせてくる。何かがおかしいと言う意識が無い訳ではなかったが、それも彼女の笑顔を向けられるとシャボン玉の様にはかなく消えてしまう。

再びぼかんとして頭からも身体からも力を抜いたルーンハルトを見て、フレイアは笑顔のままジリジリと彼に近づく。するとルーンハルトはある事に気付き、目を見開いて視線を動かさなくなつた。

彼は今、膝をついている。その為小柄な彼女の胸と彼の顔が同じ高さにあり、彼女が近づけば近づく程その豊満な胸が目の前に迫って来るのだ。

その柔らかそうに揺れる二つの膨らみの引力に逆らう事は到底出来ない。薄そうな布から溢れ出しそうな乳房は、彼女の体格を考慮すれば大きすぎてバランスを崩しているはずなのに、これこそ理想の胸なのだ。と価値観を塗り替えられそうな程形が整っている。谷間はこれでもかと柔らかさを訴えるラインを長く深く描いており、うかつに手でも入れよう物なら自分の意志では引き戻せなくなりそうな気すらした

あの胸を触る事が出来たら、あの谷間に抱きしめてもらえたら、一体どんな事になるんだろう？欲望が妄想をかきたて、ルーンハルトは恐怖を感じた。そんな事をされたらきつと何かが起きる。あまりに素晴らしすぎて、あまりに恐ろしい何か。

だが、恐怖を感じてもルーンハルトは何も出来なかった。理性も本能も彼の頭の隅っこで震えるばかりで、そんな弱弱い警鐘では到底目の前に豊満な肉体の魅力には抗えるはずもなく、フレイアが両手で彼の頬を包み、胸に向かった視線を目を合わせるように調整されてもされがままだった。

「あ……」

頬を撫でられる快感と共に、胸の谷間を凝視していた事の決まり悪さが訪れる。言うまでもなく、ルーンハルトは王子らしいマナーを幼少期から叩き込まれてきた。それなのに、こんな無礼を働いてしまうなんて。それもよりにもよって女神様相手に……

ルーンハルトが顔から火が出そうになり、罪悪感のあまり目をそらしそうになるのを見計らった様なタイミングで、フレイアは彼の頬を撫でつつ慈愛に満ちた視線と声でそつとささやいた。

「女神様に相談してみない？」

頬を撫でられる度に気持ち悪い罪悪感がこすり落とされ、代わりに温かい安堵が塗り込まれていく。彼女は自分の痴態に気付いていないのだろうか。いや、女神様なのだからそれはあり得ない。気付いた上で、あまりにも寛大に許してくださいさるんだ。そんな考えが生まれ、ルーンハルトは更に深く、幸福な服従の沼に沈み込んでいく。

「頑張ってる姿、ずっと見てたよ」

「フ、フレイア様……！」

彼女は、ずっと前から自分の味方をしてくれていたのか。私利私欲と事なかれ主義がはびこる中で両親すら頼れず、ただ一人孤独に戦っていた自分を助けに来てくれたのか。とうとう、とうとう自分は報われたのか……

彼の大義と視野を理解せず、彼の苦悩と努力をあざ笑う者達の顔が頭に浮かび、そして消えて行く。空いた場所には今日の前に降臨し、彼をいたわり認めてくれる女神の存在が刻み込まれた。

「ねぐえ」

甘える様な声と共に、ふうふうと甘い吐息が顔に吹きかけられた。近づかれた事でより分かる蜂蜜とミルクを混ぜ合わせてから極上の部分だけ抽出した様な彼女のフェロモンを吸い込まれると、ルーンハルトは自分が雲の上の世界にふわふわと連れていかれる気がしてならなかった。

「は、はひ……」

幸福感で酩酊した意識で、誰よりも慕って信じている相手に、自分の話を聞いてもらえる。これで口に鍵をかけられる訳がない。

「実は……」

ルーンハルトは語った。フレイアの事ばかり考えたがる頭を必死に動かして、自分の胸の内を全て打ち明けた。賢者の石の大きい力と、それを扱う事のリスク。大陸と他国の情勢、そこから彼が予想する将来の戦乱。彼が国の為を思っているのに、保身しか考えない分からず屋達。

主張の正否や説得力はともかくとして、彼の語る内容はそれなりの知性と教養を感じさせる熱弁だった。だがその態度はまるで初めて字を書けた子供が母親に見てもらおうとする様であり、目と表情が僕を見て！僕を褒めて！僕を認めて！と懇願していた。

フレイアはあの穏やかな笑顔のまま、時折質問を交えながら辛抱強く聞いてくれた。言葉遣

いはどこか無邪気でなれなれしかったが、彼を肯定しながら頷いてくれる彼女はやはり女神にしか思えなくて、相談相手に飢えていたルーンハルトは語る内容が思いつかなくなるまで口を動かした。

「そう……大変だったのね。そんな難しい状況に置かれていたなんて……」

「はい……どうすればよろしいでしょうか？」

いつの間にか、彼の両手は祈る様に合わさっていた。女神様ならなんとかしてくれる。女神様の言う事なら間違いないと信じ込み、すがりつく仕草だった。

「そうね……今は田舎の村に隠してあるのよね？ 具体的にはどこ？」

「メ、メンホーフ村の村長の家の、屋根裏の隠し部屋の中に……」

一瞬、いたずらっぽく女神の目が光る。だがルーンハルトはそれをえいち叡智の光としか認識できない。

「それは良くないわ。あなたの言う通り、首都に移動した方が良いわ」

「ですよね！」

「でも、すぐって訳にはいかないわね」

「はい……一体私はどうすれば……」

フレイアは顎に手を当て、うーんと考えるポーズを取った。ルーンハルトは首輪をつながれた子犬のようにリードを持つ女神の言葉を待った。

「ルーンハルト」

「!!……わ、私の名前を……?」

フレイアは初めて彼を名前で呼んだ。



「ずっと見てたって言ったでしょ。あなた、私の物になる気はあるかしら？」

女神にとって、人間は数が多すぎる有象無象ではないのか。つまり、姿を見せるだけでなく名前まで覚えて貰えた自分はそれだけ特別な存在と言う事。ルーンハルトは感極まり、泣きそうになった。今の彼なら心酔と言うタイトルの絵画のモデルに相応しいだろう。

「あ、ああ……是非、貴女の物に……」

この女神の所有物になると言う意味は理解していなかった。崇拝の対象との繋がりが出来るのなら、条件反射的に答えずには居られなかった。

(……良いのか……？何か、とんでもない間違いを……)

それでも、この期に及んでルーンハルトの理性は完全には死んでいなかった。何かがおかしい、得体の知れない違和感があると小さく小さく叫んでいた。消えつつあるろうそくの火の様に弱弱しくゆらめくそれこそ、彼が凡百の人間ではなく英雄の素質を持つ努力家である証だっ

た。ただ、この魂の火がかがり火に育つ前に、吹けば消せるろうそくである内にフレイアと出会ってしまったのが運命の分かれ目だった。

「なんの心配も不安もないのよ。私にすべて任せていれば」

（何か……このままでは駄目な気がする。でも……どうすれば……ああ……）

頬を何とも柔らかい両手で包まれるとルーンハルトの黒目はウツトリと瞼の上に加っていき、視界がぼやける

「ほーらイイ子……ほーらこうするとあなたの頭は真っ白になっちゃう私の感触に、良い匂いに綺麗な顔に蕩けてトロトロになっちゃう。ほくらとつても、とおくつても気持ち良くてウツトリしちゃう」

「あ……あ……」

「ほら、私の目を見てこの光の方を。なんとなくでいいから」

考える力が蘇る前に、自分を取り戻せる前に。ルーンハルトの魂はエメラルドよりも妖しく輝くフレイアの碧の瞳に引き寄せられ、吸い込まれてしまった。

不意にフレイアの瞳の奥に赤い光が生まれ、碧が紅に染まっていくにつれて光も広がる。

「ほーら良い子ねえ、良い子良い子、ルーンハルトは私の良い子」

その光を見ているとフワフワとした浮遊感が一段と高まり、ルーンハルトは言葉をつむぐ事すら出来なくなる。ともすれば眠ってしまいそうな程奥深い夢見心地に誘われる。

「ほくら……とつても……とおつてもいい気持ち」

身体の中、胸の辺りから何かが漏れ出し拡がっていく。

「ゆ〜っくり深呼吸してえ〜……何も考えずに頭を空っぽにしなさい……そうほらトロトロに溶けちゃう」

エコーがかかったようにフレリアの声が何重にも聞こえ、それ以外の音は一切聞こえなくなる。身体中の力が抜け自分が立っているのか寝ているのかわからなくなったルーンハルトはフレリアに頬を両手で包まれて辛うじて直立出来ていた。

「ふふ……ねえ……キスしたい？女神様と」

「えっ!？」

(したい……でも女神様にそんな事したら……でもしたい……あああああああああ)

溶けた脳では思考が正常に回らない。グルグルと思考が回っているうちに女神様の顔がぐんぐんと近づいてくる。

あの唇と口づけが出来れば。大それた願望がルーンハルトの頭にふと浮かび、直後に気付かされる。フレリアは今にもまさにその口づけが出来そうな程近づいているのに、近寄るのを止める気配が全くない。後少し、後少しで互いの唇が触れあってしまう。

(あ~~~~!!あ~~~~っあ~~~~!!)

パニックで脳内の声すら意味をなさない叫び声になる。フレイアとの接吻など、ルーンハルトにとつては望外を通り越しておそれ多い事。自分はそんな慈愛には相応しくないが、女神様を拒む事なんて出来ない。願ってはいけない願いなのに、願わずには居られない。

ルーンハルトは欲望と信仰のはざままでどうしていいか分からなかった。しかし、幸か不幸か彼には元々選択肢など与えられていなかった。

「チユツ」

ついでに様な、軽い軽いキス。彼がされたのはそれだけだった。だがそれだけでルーンハルトの世界は作り変えられた。

口づけは一秒も続かなかつたが、その刹那だけで彼女から何かが流れ込んでいた。まず味わったのは体が光の粒で洗われる様な感覚。それがえもいわれぬ官能の渦となり、魂ごと全身



をかきまわす。元から熱かった身体が更に燃え上がり、何か灰になるまで焼き尽くされた気がした。

天地がひっくり返る様な体験に慣れる暇もなく、今度は不意に身体の中で爆発が起きて灰にされた何かが吹き飛ばされ、跡形も無くなってしまふ。あまりの火照りに頭から煙が出た気すらしたが、それがもう要らなくなった焦げクズを排出している様だった。

事ここに至って、ルーンハルトはようやく自分が性的に興奮している事に気付いた。自分の股間が下着を汚し、突き破らんばかりにズボンを膨らませている事に気付いた。だがそれすらもどうでも良い程に彼は魅了されていた。フレイアの側に居られればそれ自体が延々と続く絶頂に等しく、射精欲は二の次となっていた。

ルーンハルトはもうフレイアしか見えなくなった。フレイア自身も少し観察してそれを確信したのか、にっこりと笑ってとても優しく、優しく言った。

「平伏しなさい」

彼女の言葉を聞いた途端、ルーンハルトはまるで紐で四肢を操られる様に即座にひざまずき、豪勢な絨毯が敷かれていなければ流血していたであろう程勢いよく額を叩きつけた。

勿論王子たる彼は女神と出会うまではこんな事をした経験はなく、逆にされる側であり、それを心良く感じる事もなかった。だが今、彼は盲信出来る相手に服従する喜びを知った。己の全てを委ね、全てを差し出す事がどれ程の安らぎと充実を生み得るかを知った。

「これであなたは私の……フレイアの物よ」

(あ~~~~~つフレイア様あく……)

女神の名が決して消える事のない刻印を彼の胸に刻んだ。精神と肉体両方が熱を溜めすぎていて、いくら熱い吐息を漏らしてもいささかも冷めてくれなかった。頬が内側から黒く焦げないのが不思議な程だった。

「返事は？」



「はい！私の全てはフレイア様の物です！」

忠誠を誓うだけで誇らしさが湧き上がり、同時に股間が激しくうずいて腰まで震わせる。床に手をついたまま発情している様子は人と言うより犬だったが、たとえ彼がそれに気付いたとしてももつと平伏したくなるだけだっただろう。

「ふふっ、よしよし。頭を上げて良いわよ」

「ああ……」

許しを得て、下から見上げるのも格別だった。支配者に相応しい風格を備えた表情が自分は女神の庇護下にあるのだと実感させてくれ、国のどんな美女でも嫉妬するに違いない程磨き上げられた肢体がジンジンと彼の腰を痺れさせる。

「忠誠を誓いなさい」

「はい……」

すつ、とフレイアの右足が鼻先に差し出される。ルーンハルトは忠誠の証に誰かの脚に何かすると言う文化は知らなかったが、何をすれば良いか瞬時に理解できた。

割れやすい陶器の様に大事に大事に両手でその足を支えると、あまりの名誉と肌触りに気絶してしまいそうになる。それをフレイアへの思いでこらえ、足の甲に口をつけると、ますます全てを彼女に差し出せた気がした。

「フレイア様に私の全てを、ささげます……」

夢うつつの状態でも口は彼の望む言葉を紡いでくれた。フレイアもまた満足気に顔をほころばせ、彼を更に彼女の物にしてくれる。

「では、女神様に貢物はあるかしら？」

遠ざかっていく足を名残惜し気にブーツと見つめていたルーンハルトは、フレイアの催促で夢から覚めた様に慌てて部屋を見渡した。そうだ、なぜ気付かなかったのだろうか、ただの言葉

では駄目だ、何か大事な物を……そう焦って盛んに首を振っても、この質素な執務室には女神に相応しい代物などない。いや、宮殿中を漁っても、宝物庫をひっくり返してもそんな物があるとは思えない。

「で、ではこれを……」

ならばせめて自分の持ち物の中で最も価値のある物を。ルーンハルトは迷いなく決意し、首にかけていた八面体の水晶のネックレスを外してうやうやしく差し出した。だがフレイアは受け取ろうとせず、水晶越しにいぶかし気な視線を向けるだけだった。

「これは？」

「王家に代々伝わるネックレスです。相当な魔力が込められているはずなのですが、私には使いは全く……何かフレイア様の役に立てば幸いなのですが」

「ふーん？ 王家に代々伝わる物を差し出しちゃって良いの？」

フレリアに言われて初めて、ルーンハルトの軽くなった頭はこのネックレスを手放したらどうなるかを考えた。王位継承権の証にも等しいこれをいつも身に着けていたのに、突如身に着けなくなったら誰もが驚くのは想像にたやすい。紛失したと言えば大騒ぎになるし、着けたくないのだなどと言えば勘ぐられるだろう。

「だからこそ、です」

だが、構う物か。女神様に比べれば、王も王妃も取るに足りない。今更これは捧げられないなどとは絶対に言いたくないし、面倒な事になったとしても女神様に忠を尽くす為の試練なら悔いはない。

「私にはフレリア様に相応しき物がありません。ですが大事な物をささげ、それを苦しめない事なら出来ませう」

犬の様に発情した息と肌と身体でなければ、さぞかし英雄的であろう覚悟を示したルーンハルトを、フレリアは心の底から嬉しそうに目を細める事でねぎらった。

「駄目よ。あなたはこの国をちゃんと引つ張っていかなきゃいけないんだから。だから、これは受け取れないわ。ちゃんと自分で身に着けておきなさい」

「す、すみません！それでは、何か別の……」

慌ててポケットの中をまさぐり、部屋を見回すルーンハルトの顔をフレリアの両手が包み胸元にスツと抱き寄せる。

「いいわよ、そんな大事な物をくれようとした、その気持ちだけ受け取っとくわ。ありがとう。あなたの忠誠は私にとって、何よりの宝よ」

「おお……！おお、おお……！」

ルーンハルトはどうとう感涙した。自分が空前絶後の幸せ者だと確信して、フレリアへの感謝と慕情で胸が張り裂けそうだった。

フレリアは彼にしばらく自分の胸元で涙をこぼす事を許してから、どこからともなく腕輪を

取り出した。紫に輝く楕円形のアメジストがはめ込まれた腕輪で、ルーンハルトの腕の太さにちょうど良さそうなサイズだった。

「お礼に、私からこれをあげる」

「これは……？」

「あなたの献身を認める物よ。これを私だと思って、常に肌身離さず着けておきなさい。そうすれば……」

女神の顔が近づき思わず息をのむ。

「っ……」

口と口が触れ合うと思った瞬間、すれすれで女神の顔は横に反れてしまい顔が交差する。

「私といつも一緒よ」

耳元から女神の息吹が吹き込まれ、それが脳に直接当たったような感触。ゾクゾクが足の先から頭の上まで駆け抜ける

「あ、ありがとうございます!!ありがとうございます!!」

信仰の深さの象徴まで貰えてルーンハルトはより一層舞い上がり、いそいそと腕輪を左腕に通した。吸い付く様なひんやりとした感触が、汗だくの肌に気持ち良かった。

「ふふふ……やっぱりあなたにとつても良く似合うわ。かつこいい」

「そ、そうですか!?あは!あははははは!」

ルーンハルトはまるでおもちゃを買い与えられた少年の様に左腕を高く掲げ、照明の光を反射する腕輪をウツトリと眺め大事そうに撫でた。

女神様に出会えた。悩みを聞いて頂けた。忠誠を誓った。それを認めてもらえた。次はなん

だろう。次はどうやってより深く、女神様と共にある事が出来るのだろう。

「じゃ、私は一旦帰るわね」

「えっ!？」

いつまでもいつまでもこの蜜の様な一時が続くと錯覚したルーンハルトに、フレイアはいつもあつさりと夢の終わりを告げた。

「そ…そんな…もう…」

驚愕に目を見開き、まるで母親に見捨てられる少年の様な表情になるルーンハルトは彼女が去って行く不安に耐えられず、膝をつきすぎるような視線を送る

「そう、これからは毎晩そうやって、ひざまずいて女神様にお祈りをささげるのよ。自分の出来る限りを尽くして女神様のため働くことを毎晩誓うの。いいわね?じゃ」



「あゝフレイア様っ！」

去ろうとする仕草に思わず手を伸ばす赤子のような彼をフレイアは相変わらず優しさ溢れる笑顔で見下ろし、おもむろに足をスツと前に差し出す。

「大丈夫、またすぐ会えるわよ。その腕輪をつけてれば、ね。だくかくら、今日の誓いをしっかり頭と身体に刻んでおきなさい」

ルーンハルトのズボンにくつきり浮かんだ膨らみをツツとフレイアの爪先が撫で上げた。

「ね？」

「ホアッ!？」

股間から火花が生まれ、全身の神経を駆けめぐり、情けない声が喉から勝手に出た。あつ、と思う暇もなく精液が噴き上がり、下着とズボンに染み込んでいく。その度に身体中がピクンピクンとけいれんの波に揺るがされる。

「うひ、はっ、あがあっ」

恥ずかしいと思う力すら奪われ、床で跳ねまわる彼の反応をフレイアはさも当然のこのように一瞥しただけですぐに背を向けスタスタと歩いていく。

「バイバイ」

未曾有の昇天の余韻の沼に首どころか口まで浸るルーンハルトは、投げキッスを送りながら普通にドアから部屋を出ていく女神様をぼうつと見ていることしか出来なかった。

## 一. 襲撃

メンホーフ村。フランク王国の辺境にある、比較的恵まれた農村である。その人口はおよそ150人で、世帯は40と言う決して大きいとは言えない村だが、土地が肥えていて凶作とは無縁で、飢えの怯えがない生活が村人たちの心を温かくしたと言われる。ヘルムと言う少年もまた、この村の人間らしく素朴だが素直な男の子だった。

メンホーフ村の者達は週に一度、10名程で首都マインツへ農作物を売りに出て生活に必要な品物を買って帰る。この「買い出し」以外村の外と交流するチャンスは無いので、参加者の中で最年少のヘルムにとってはこの小さな遠征は至福の一時である。

行きは期待に胸を膨らませ、首都につけば生き生きと農作物を売り、僅かな自由時間で都見物。その後は村では手に入らない物ばかりの楽しい買い物、そして夕日に照らされながら土産を持って帰る帰路。日の出前に起きて出発しなくてはならない事などまるで苦にならない、素晴らしい一日だった。

今日は特に売れ行きが良く、普段は売れ残りも出る農作物が全てさばけたので朝は野菜臭かった荷台に首都で買った物の山が出来ていた。その内の一つ、彼が貯めたお駄賃で買った絹の織物を見てヘルムは顔をほころばせる。

母親はきつと今頃夕飯を準備しているだろう。まだ帰ってこないのか、と心配しているかも知れない。母が欲しがっていたこの織物を渡せば、母も父も喜んでくれるに違いない。ああ、待ちきれない……

一日の最高の締めくくりを想像するヘルム。だが急に先頭の荷馬車が止まった瞬間、彼の幸せも止まった。

「おい、どうした？ 具合が悪いのか？」

引率の年長者が荷台から降り、先頭の荷馬車を引いていた若者に駆け寄る。若者はすぐには答えず、手を耳に当ててしばらくたつてから焦った顔で振り返り、ようやく答えた。

「鐘が……」

「なに？」

その言葉だけで、他の者達も顔を強張らせて耳をすませる。ヘルムもまた意味を理解し、腹の中に焦りが生まれるのを感じながら下を向き、目を閉じて耳をすませると、確かに聞こえた。危険を村全体に知らせる為に設置されている鐘の音が、今までにない程激しく打ち鳴らされているのを。

ヘルムは最初、それはいつもの訓練目的の音だと思った。彼は今まであの鐘が訓練以外の用途で鳴らされるのを聞いた事がなかった。だから今回もきつとそう、実際に何かが起こった訳じゃない。腹から胸へせり上がっていく嫌な焦燥感を飲み下したくて、ヘルムは必死に自分に言い聞かせた。

だが、周りの大人達は同じく焦りながらも現実逃避はしなかった。彼らは互いに何か言葉を発する時間も惜しいとばかりに、せっかくの購入品が乗った荷車を放り出して村へ向かって走り出した。

（嘘だ。何かの間違いだ。僕達を脅かそうとしてるんだ！）

ヘルムは再び自分に言い聞かせようとした。しかしその誤魔化しを自ら打ち消す様に走り出していた。不安を打ち消す言葉を何度復唱しようと、吐き気に似た焦りは消えてくれなかった。だから足を使って逃げようとした。

村に辿り着きさえすれば、この不安は消えるはず。何も起こっていない、いつもの平和な光景があるはず。ほら、建物が見えてきた。燃えているわけでも煙がたっているわけでもない。だから大丈夫。きつともうすぐ誰かと出会って、何をそんなに急いでいるんだって笑ってくれて……

ヘルムの思考はそこで途切れた。

「おじさん……？」

やっと辿り着いた村の入口に何かが転がっていた。それは見慣れた顔のおじさんに良く似ていた。だが彼が知るおじさんは、アルバンはこんな真つ青な顔をしていないし、小さな血の池

の中でうつ伏せに倒れている趣味も持っていない。

「おじさん!!」

頭が真つ白になるのを感じながら、ヘルムはアルバンに駆け寄って肩をゆすり、そしてまるで火傷をしたかの様に手を離れた。身体中あちこちの皮膚が青、赤、紫とうつすらと変色し、口からゆっくりと血を流しているのを見れば、ヘルムにも分かった。これが死体だと分かってしまった。

生まれて初めて死と言う物を目の当たりにしたヘルムは、気がつけば尻もちをついていた。足がすくんで立っていられなかった、と言う事を理解するまで十秒はかかり、もう一度死体を見る事でようやく立ち上がる事が出来た。

「お父……さん、お母……あん」

今にも泣き出しそうな声が勝手に漏れる。足は中々言う事を聞かず、何かのはずみで崩れ落ちてしまいそう。この状態でヘルムがそれでも走れたのは、親を頼って恐怖から逃れたい一心

の賜物だった。

涙でぼやける視界。耳鳴りの様に近くで悲鳴が響いている。誰かが何かにやられて居るのだろうか。一体誰が？一体何に？なんで？なんで？なんで？

村の入口からそんなに離れていないはずだった自分の家がとても遠くに感じる。目に入ってから実際に辿り着くまで長い時間がかかった様に思えてしまう。外観はいつもと同じ様でほんの少しだけ安心させてくれたが、中で両親がアルバンの様に倒れているのでは、と言う思いは消せない。

「お母さん！お父さあん！」

叫びながらドアを開けるヘルムが見た物は……ロングソードをぎこちなく持って身構える父親と、震えながら彼に寄り添う母親の姿だった。

「ヘルム！良かった！無事だったか……」



父親は安堵の表情を浮かべながら急いでヘルムを家の中に招き入れ、すぐさま家のドアの鍵をかけた。自分よりも大きな姿が、自分と違って足をすくませずに動いているのはとても頼もしく見えた。

「ああ……ヘルム」

母親は顔を弱弱しくほころばせながら、全身を使ってヘルムを抱き締めた。母の温もりに包まれ、帰ってこられたんだと実感し、ヘルムは涙をこぼしながら強く抱き返した。彼女と近くに居る程、恐怖が遠のいていった。

「お母さん……良かった……！」

もう大丈夫だ。お父さんもお母さんも大丈夫だった。だから大丈夫。ヘルムは今度こそそう思おうとした。だが顔を上げてみれば、両親共わずかに安堵しつつも険しい表情のまま、悪夢は終わっていないのだと思い知らされた。

「い、いったい何が……」

「襲撃だ……」

そもそもヘルムは何が起きているのかを知らない。ただ鐘がけたたましく鳴らされていたのを知っていて、死体を一つ見ただけで、後は何も分からない。

「なにが……モンスター？」

きつとお父さんとお母さんなら知っているはず。特にお父さんは、昔は兵隊さんをやっていたくらいで、だから今でも剣を持っているんだ。だからお父さんなら……

「分からん。俺の方が知りたいくらいだ」

ヘルムの期待は応えられなかった。まだまだ親の万能性を信じていたい年頃の彼の願いは、過酷な現実には跳ね返された。

「ここに来るまで何か見たか？」

窓から外の様子を確認しながら父親が聞いてくる。ヘルムは再び胃の中の気持ち悪さと戦いながら、何か役に立つ情報はないかと頭を動かした。

「何も見てない……け、ど……」

何か見たか。何を見たか。そんな物は決まっている。

「う、ううん……アルバンさんが、アルバンさんが……死……し……!」

「もう分かったわ!もう良いわ、ヘルム!」

思い出しただけで涙があふれそうになり、言葉が詰まってしまふヘルムを母親がひしと抱き締めた。父親も扉と窓に視線を散らばしながら、やりきれなさで息を吐く。何も分からないが、何も起きていない、小さな小さな安らぎの一時。

それを破ったのはドアが勢いよく叩かれる、ドンドンと言う音だった。ノックではなく、明

らかにドアを力で破ろうとしている破壊の音だった。

ヘルムと母親はぎゅうつと固く抱き合い、目を閉じた。きつと大丈夫。モンスターが入ってきてても父親が何とかしてくれる。互いにそう言い聞かせる様に、きつくきつく抱き合って震えと体温を分かち合った。

親子たちが来るな、来ないでと念をぶつけたドアは叩かれるごとに無残にゆがんでいく。そしてついに、ドォーン！と断末魔の様な音をあげながら蹴破られた。

「ひいっ！」

ヘルムはそれ以上目をつぶり続けられずまぶたを開いてしまったが、ドアの方を振り返る勇氣はなかった。ドアの破壊音の次に聞こえるのはモンスターの唸り声か、ゴブリンなど亜人の下卑た言葉か、あるいは人間の賊による脅迫か。刹那の間に様々な可能性を想像しながら、母親と共に震える事しか出来なかった。

「あら……男おっ！」

彼の耳に届いたのは、そのうちのどれでもなかった。

「あつ！見て、可愛い子居る！多分初物だよ。あれ」

どちらかと言えば耳に心地よい、美声と言っても良い女性の声だった。

「うわくお！やっぱりこつちの家でせいかい！」

あまりに想像とは異なり、あまりに不自然な声を聴いたヘルムは母の肩越しにドアの方を見た。

「えっ……？」

彼の身体の中で、何かがずくんとうごめいた気がした

彼の視界に映ったのはモンスターの類ではなく、3つの豊満な女体。それも胸と股間を隠す

僅かな布以外はほぼ全裸と言って良い、きわめていかがわしい格好をした女達だった。

魔物とは無縁の村で育っていたため、殆ど知識は持ち合わせていないヘルムだったが彼女達が人間でないのはすぐわかった。背中に大きな黒い翼があり、頭には角があり、耳は長くどがついて、更に恐らくは尻の上から黒い尻尾が生えている。特に翼と尻尾はまるで意志を持つかの様に頻繁かつ不規則に動いている。

警戒心を高め、その動向を注意深く観察しながら、何か妙な気分になっていくのが止められなかった。少し気を抜くとこの緊迫した状況を忘れてしまいそうな程オスの衝動が騒いでいたが、魔物の知識同様、性の知識も皆無だったヘルムにはその心臓の高鳴りは命の危機に瀕したそのものとしか思えなかった。

（誰、このお姉さんたち……？人間じゃないのは分かるけど、じゃあ、何なの……？すごく綺麗だけど……あれ……なんか身体が暑くなってきた……？なんで……）

カシャ、と金属の甲高い音がヘルムの恍惚の邪魔をした。我に返ったヘルムが見たのは命綱であるはずのロングソードを落とし、真っ赤な顔ではあはあと息を荒げている父の姿だった。

「お父……さん？」

（攻撃された？魔法？）

父は肩を上下に震わせて立っているのもやつとの状態に見えるが、魔物達の方は何もせずニヤニヤと父の様子を見ているだけに見える。真ん中に立っている、一番年長に見える穏やかで優しそうな長髪の魔物が軽く身を前に出し、手のひらを上向きにして口元に添え、吐息をフーッと吹きかけていた。ただそれだけだった。

そのはずなのに、父親はふらふらと庇っていた妻子から離れ、魔物達に歩み寄っていつてしまふ。その姿はドアを破られる前の頼もしかった背中とは違いとても頼りなく見えた。

「あなた！やめて!!」

「お父さん！お父さん！」

咄嗟に出た息子と妻の必死の叫びも届かないのか、父親は何も言わないまま、長髪の魔物に

身体がぶつかる程近づいた。それを待っていたと言わんばかりに魔物は父の顔を両手で包んだ。

「助けて……お願い……神さま……」

父の顔がそのままグシャリと潰されるイメージが脳裏に浮かび、直視している事が耐えられず、ヘルムは目を伏せて祈った。その一瞬の間の後、小さな水音と色っぽく漏れる吐息がヘルムの耳に届く。

「ンツ……ハア……」

うつすらと開いた瞳には父の後頭部しか見えなくて、何をされているのか分からない。母なら知っているかと思つて彼女の方を見ても、信じられない物を目にしたと言わんばかりに口をあぐりと開けているだけ。

まさか父の顔が食べられているのではないか、とそろりそろりと横に移動し父親の斜め後ろから見る事で、やっとヘルムは見る事が出来た。あのいやらしい魔物と父が口づけをしている姿を。



母親と同じく口をあんぐりと開けながら、ヘルムは困惑を強めた。性にうとい彼でもキスの事くらいなら知っている。愛し合う者同士でしかしてはいけない神聖な親愛の行為であり、両親がしているのを見た事がある。いつかは自分も可愛い女の子としてみたいと思っていた、特別な関係の証のはず。出会ってすぐの魔物としていいものではない。

それなのに、今、父は人とは思えない女と熱烈な口づけを交わしている。しかも母としている物よりはるかに過激な、口を貪りあい、舌を絡め合う淫らな代物だった。舌は上に下に交わり、唇同士が半開きのまま密着する。唇が離れたと思うとはあはあという荒い呼吸の後、再び惹かれ合うように唇同士が濃厚に密着する。これだけでも十分衝撃的な光景なのに、更にいつの間にか魔物の衣服は消え去っていて、父はその乳房を必死に揉みしだいていた。

「何してるの……? やめて……!」

しばらく、ぽかんと口を開けて見惚れる事しかできなかったヘルムは母親のか細い悲鳴で今、どういふ状況に置かれているのかを思い出した。

しかし、二人の口は離れようとせずお互いを求めあうように舌を絡め合い続けている。父親の視線はうつとりと魔物の女を見つめているが、魔物の方はまるで見せつけるように得意げな表情でヘルムと母の方をジツと見つめながら舌を濃密にからませている。

「お父さんっ！お父さんっ！」

母親の悲壮な表情にヘルムも思わず声を出す。しかし、二人の間に唾液の橋が出来たのはヘルムが諦めるまで叫んだ後だったし、口を離したのは魔物の方からで、父親は物欲しそうに首を伸ばして離れていく唇を追っていた。

「ふふふ、どう？この躰からだ。たまらないでしょう？あなたも脱いで頂戴？挿入れさせてあげる。奥さんに見せつけてやりましょう？」

だらしなくよだれを垂らしたヘルムの父には息子と妻の声は聞こえなくても、魔物の煽情的な声は聞こえるらしく、先程よりもっと荒くなった息を漏らしながら、イソイソズボンを下ろすと、完全に勃起したペニスが勢いよく跳ね上がった。

ヘルムが風呂場で見た父のペニスとは全く違う、血管が浮き出るほど怒張しビクビク震えるペニスに衝撃を受けたヘルムだったが、自分の股間を服の上から無意識になぞると、自分のモノもなぜかズボンの中で窮屈そうに固く、大きくなり、ズボンの布を持ち上げていた。

「やめて！あなた、お願いだから！」

「お父さん！」

妻子が涙ながらに大声で叫んだ時、父親はようやく長髪の魔物の後ろに突き出された尻の下へ動く足を止める事が出来た。妻の存在を目にし、自ら破滅に突き進むうとしていた事を、本当に守るべきものを理解したのだ。

「ほらほらあゝ……あそこに挿入れるんだよ。気持ちイイだろうね」

だが、ほんの一瞬だけホツと息をつけたヘルムと母親の表情は再び歪んでいく。今までただ見ているだけだった短髪で活発そうな印象を受ける魔物が後ろから抱きつき、父の背中をその豊満な躰で押し出したのだ。

「ひっ……ひいっ！」

短髪の魔物は殆ど力を入れておらずとも、ヘルムの父はジリジリと前に歩いてしまう。何とか足を止める事は出来たが、少しでも背中を押されるとそれに抵抗することは出来なかったのだ。背中に二つの柔らかい膨らみを感じている事もその要因だった。

「気持ち良いよ……ほら、ドキドキしちゃってるんでしょ？ねえ」

挑発的に振られる尻を見つめる父の視線は、怯える様にも期待している様にも見えた。必死に顔をそむけているのに、視線だけは魔物の尻と股に釘づけにされていて、目をつぶる事すら出来ない。それは横から見ているヘルムも同じだった。

「ひ！ひっ！ひいひいひい！！」

何も出来ないまま父親はジリジリ押され、どんどん前へ押されていき、とうとうペニスと魔物の尻、正確には尻の下あたりへ押し付けられて、くちゅつと音を立てる。

「あはあ〜ん」

長髪の魔物が嬉しそうに後ろを振り返り、指を舐めた。するとそれが上手く結合した事の合図だったのか、短髪の魔物が自らの腰で更に父親の腰をゆっくり、ゆっくりとヘルム達、そして父親に見せつけるように押し出していく。

「ぬちゅ……ぬちゅぬちゅ〜♪」

「あっ……」

ペニスが内部にズブズブと飲み込まれていくのを見て、ヘルムも思わず声を上げていた。

「ほくら、ゼーんぶ挿入<sup>はい</sup>しちゃった♪奥までゼーんぶ飲み込まれちゃったよ？どう？」

「……………って聞くまでもないか」



「あつ……ああ……は……はああああ……」

ペニスが見えなくなるまで飲み込まれた時、父は恍惚の溜息を漏らし、天を仰ぎだらしく舌を出した弛緩した表情になっていた。

短髪の魔物は愉快そうに父の両手を取り、長髪の魔物の尻から腰のあたりに添えるように誘導してから父の耳元で何か囁いてから父から離れていった。

「お父さんっ！」

ヘルムはチャンスだと思った。なぜ父があゝの魔物の尻をあれ程恐れるのか、あそこまで密着して何をしているのかは分からなかったが、それが危険なら離れてしまえば良いはず。あの短髪の魔物はもう押していないのだから

「ひっ！ひいっ！」

駆け寄ろうとしたヘルムは一步強く踏み出したところで父親のあげた奇声に固まった。

「ほへっ！ほええっ!!」

父は魔物の腰に浅ましくしがみつき、腰を振りだした。その顔は嬉しそうに弛緩しており、その尻から離れる気はない事だけは分かった。

「あーあ……もう止めらんないよぉ〜」

それを見ている二人の魔物達はクスクスと楽しそうに笑っていた。

「ああつ！あつ！ああああああんっ!!」

パンパンと肉がぶつかりあう音と、ずちゅずちゅと湿った場所がかきまわされる音が交互に響く。その間に父親が漏らす声は、最初は怯えが強い叫び声だったのに、次第にあうあうと呂律が回らなくなっていく。恐怖にひきつっていた顔はあへあへとだらしなく緩み、正気を取り戻しかけていた目はうつろに曇り、口は荒い息はそのままによだれをしたたらせていた。



「はっ、あくああく、んう〜」

父が一心不乱に腰を振る度に、突かれている魔物もなぜか嬉しそうにあえいでいる。とは言えどう見ても様子がおかしい父とは違い、魔物は純粹に楽しんでいると言った様子で、この行為が魔物の方に有利に傾いているのはヘルムの目にも明らかだった。

（なっ…なにを、しているんだー!?!）

ヘルムは身を乗り出して食い入る様な体制であんぐりと口を開いた表情で固まり、その光景から目が離せなかった。この二人がやっている事は戦いではない。何かいやらしい事だと言うのも分かる。だけど、なぜ父が母をさしおいてこんな事を、それもこんな非常時に？

次第に父に対する失望と怒りの感情が湧いてくる。自分と母親がこんなに呼びかけているのに、村の皆が大変な時に何をしているのか。せつかく敵は油断していてチャンスなのに。自分だけが気持ち良さそうな事に夢中になっている。自分だけが…その怒りの根源には『自分も同じ事をしてみたい』という妬みがあったのをヘルムは自覚できなかったが、父親の動きに合わせて前後に腰が動いているのがその証拠だった。



(あれが……チンチンの使い方……なの？すごい気持ちよさそう……)

「ヘルム！」

「ふえっ？」

「ヘルム、しっかりしなさい！私の声が聞こえる？」

「うっ、うん……」

目の前に現れた視界を遮ったものが母親の手だという事を理解して、思わず外そうとした右手を抑える。しかし視界を奪われた事でより聴覚に訴えかけてくるクチュクチュという水音、パンパンという肌がぶつかり合う音、そして『あつ、あつ』といやらしく響く魔物の喘ぎ声により行為の続きを見たいという欲望を抑えるのは大変だった。

「良く聞いて。あれはサキユバスだわ……」

「サキュバス……?」

顔を自分に向けさせ、語る母の顔は悲壮の一言だった。何かを覚悟し、決意したと一目で分かる表情で、ヘルムの頭の中にかかっていたピンク色のもやが吹き飛ばされる。

「男の精を餌にするモンスターよ！ああやって……せ……その……精気を吸い取って殺してしまおう！」

「ええっ!?じゃあ、すぐお父さんを助けないと！」

魔物の正体が断片的ながらようやく分かり、ヘルムは改めて父が危険にさらされている事を理解した。先ほど感じていた失望と嫉妬が正義感と家族への情に変わり、ヘルムは勇ましく宣言したが、母は悲しそうに首を振るだけだった。

「戦ってもとても勝てないわ……お父さんでも、あんなったのだもの」

「そ、そんな……」

「だから、私が気を引くわ。あなただけでも逃げなさい」

「えっ!?でも……でも……!」

母の宣告は父と母を見捨て、自分だけで生きていかなければならないと言う事を意味していた。そんな覚悟を一瞬で決められる男の子など滅多に居ない。もちろんヘルムも例外ではなかった。

この時母親が自分も後から追いつく、と嘘を言えばヘルムは逃げられたかも知れない。だがサキユバスが三人居た時点で結局彼の運命は変わらなかった。

「よし、じゃあボクはこっちの子を頂いちゃおうと」

「ひっ……!」

ヘルムが躊躇っている内にいままでずっと見ていただけだった、ヘルムより少し年上にしか見えない少女の魔物と短髪の魔物が眼前に迫っていた。彼女達は母と子が今生の別れをしようとしていた事などまるで気に留めず、怯えるヘルムを品定めし始める。

「あー、アタシ初物大好きいー！いっぱい気持ち良くしてあげるからなあー」

「……！あんたらなんか、ヘルムは渡さないわ！」

「ヘルム君って言うんだあー？ふふ……じゅるり……おいしそおー！ねっ？君もお父さんと同じことしたくない？信じられないくらい気持ちいいんだよおー？」

母親の睨みつけも言葉もまるで無視して、二人のサキュバスは身を乗り出し、ヘルムに訴えかける。更に短髪の魔物は腰を折り曲げて顔を近づけ、見せつける様に半開きの口から舌を艶めかしく唇の内側に這わせている。

「レロエロオー」

サキュバス達から隠す様にヘルムをぎゅつと強く抱きしめ、うずくまる母の腕の中で得体の知れない何か自分が自分を揺るがすのを感じ、ヘルムは父親の取った行動の理由がなんとなくわかった。こんな事を考えている場合ではないのに、逃げるか戦うかを選ばないといけないのに、父と同じ様な事をされたくなくなってしまう。

そんなヘルムの状態を知ってか知らずか、短髪の魔物の挑発は更に過激になっていく。二人の目の前で剥き出しの秘所を指でくちゅくちゅと卑猥な音をたてて弄りながら艶めかしい声を上げ始めた。」

「あつ……んっ……はあつ、ん……ヘルム君の初めてえ……どんな反応しちゃうのかなあ……？ああん♪楽しみい〜」

「くっ！こ……のおお!!」

母が怒りの表情で立ち上がり、サキュバスに向かって突き進んだのはその時だった。懐から取り出した料理用の包丁を手にし、隙だらけのサキュバスの腹に怒りのままに突き出そうとした。

「うるさいなあ、女は邪魔だ……よっ！と」

悲しい事に、母親のありつた力の力はまるで足りなかった。短髪の魔物は母親の両手を片手で抑え、いとも簡単にその動きを止めてから、腹を豪快に蹴り飛ばした。母親の身体は軽いボールの様に宙を舞い、壁に叩きつけられて凄まじい音を立てた。

「お母さん！お母さん！」

ヘルムはすぐさま母の下へ駆け寄り、必死に肩を揺すつたが、反応はまるで無かった。悲鳴すら上げなかった母は、いくら声をかけても何も答えてくれなかった。

「あーあ、死んじやった」

少女の魔物も近寄ってきて、面白半分にも母親の脈を取り事も無さげに肩をすくめて宣言する。それだけでヘルムは全身が巨大な金づちで殴られた様な気がした。



「えっ……死……う……嘘だ！ 氣を失っているだけだ！」

そんなはずはない、とヘルムが呼びかけと揺さぶりを続けても、得られたのは母の口から血が垂れて来ると言う光景だけだった。あの優しい笑顔が脳内を駆け巡り、今の生気がない壊れた表情に塗り替えられていく。

「えっ!? ちよっつと脚で触っただけなのに！ ほんと、人間って脆いね」

「んもおく……お母さんの見てる前でヘルムっちを男にしてあげたかったのに」

あり得ない。こんなの信じたくない。ヘルムはそんな思いに浸る事すら許されない。母をこうした張本人たちの、あまりに能天気な会話と笑い声が悲しみを怒りに作り変える。

「あああああああああ!!」

憎しみに赤く染まった視界の中で、母の手から転げ落ちた包丁を手に取り、サキユバス達と対峙した。

「やだ、こわい」

「そんな危ない物しまお？ね？」

サキュバス達は互いに抱き合い顔を摺り寄せて怯えるようなポーズをとっているが、顔はニヤニヤと余裕たつぷりの笑顔を浮かべている。逆にヘルムは怒りながらも恐怖で全身を震わせ、歯をガチガチと鳴らしていた。怒りの力を総動員しているのに、立っているのがやつとと言いう有様。

こんな状態で、村で平和に暮らしてきた自分が勝てる訳がない。しかも戦闘訓練など全くしていない自分でも分かる程、優れた身体能力をこのサキュバス達は持っている。力の差は火を見るよりも明らかで、勝ち目は皆無。それなら、どうせ死ぬなら、自分に出来る唯一の抵抗は……

ヘルムは固く目をつぶり、包丁で自分の首を思い切り突き刺した。鋭い痛みと共に首から噴き出した生暖かい血が手に降りかかり、ヘルムも母親の元へ……

旅立ってしまったはずだったが、彼の手は全く動かなかった。恐怖のせいではなく、短髪の魔物の手がヘルムの手を抑えつけていたためだった。

「駄目だよ？大事な命をそんなに粗末に扱っちゃ」

母の命を簡単に奪った奴が何を言うのか

「は……な………せつ………！」

ヘルムは力を込めた。視界の隅に映るいとも簡単に命を奪われた母の姿を糧に、全身全霊を込めて包丁を首に引き寄せようとした。だが包丁はまるで硬い物に刺さっている様に前にも後ろにも全く動かなかった。

「ふぬくくつ！ふぐうーーっ」

「駄目って言ってるのに……」

「あがぁ！」

短髪の魔物の手がヘルムの手首を強く握る。本気を出されたら簡単に握りつぶされてしまいそうな力に屈し、手から包丁が滑り落ちる。床にカチャンと落ちた包丁は短髪の魔物によつて蹴飛ばされ、床をス——つと滑り遠くの壁にカチャンと虚しくぶつかる音が聞こえた。

「ふふふ……お母さんが必死に守ろうとした命、粗末にしちゃ駄目だぞ〜」

もはや、自分の命を絶つ事すら叶わない。ヘルムはまず絶望し、サキュバス達の憎たらしいにやけ顔と動かなくなった母の姿に、血がにじむほど強く拳を握りながらふるふるとして身体を震わせた。

「くそっ……ぐぞお……」

短髪の魔物はヘルムの顎をクイツと持ち上げ顔を近づけ、悔し涙を流し、唇を噛んでグチャグチャにゆがんだその表情を口角を釣り上げながら堪能する。

「んゝ…いい表情かお」

更に少女の魔物も背後から肩に顎を乗せ、からかうように口を突き出しながら横目でヘルムの表情を観察する。

「美味しそゝ。いゝつぱい遊んであげるからねゝ」

前から後ろから、左右の耳元にクスクスという耳障りな嘲笑が頭に響くことで悔しさが膨れ上がり、サキユバス達を喜ばす事だと分かっているも溢れ出る涙を止められなかった。

「君が死ぬ事を許されるのは…アタシ達が飽きるまでめつつちやくちやになぶたそのあ  
・と・で♪」

「キヤーハハハハッ」

### 三・逃亡

「あ、あひつ！やめて、くれえ……」

「あはは！何でやめるのよ。やめる訳無いじゃーん」

「お、おねえさん、つらいよお……もうやだあ……」

「大丈夫、最後まで気持ち良いままですよ。うふふ」

ヘルムの家で起こった悲劇は、似たような形でメンホーフ村のあちこちで繰り広げられていた。大勢のサキュバスがまるでゲームを楽しむ様に人間を探し、狩り、犯し、そして殺している。

「ど、どうかこの地下室に気付きません様に……」

「しっ！静かにしている！」

多くの者はサキュバス達になすすべもなく犯されていくしかなかった。比較的幸運な者達はいち早く隠れる事が出来たが、それもいつまで持つ物か分からない。仮に見つからなかったとしても、いつかは外に出ないと飢え死にしまう。

「くそっ……王都の軍は何をやっているんだよ。早く来てくれよ……！」

「こんな辺境の村にわざわざ助けに来てくれる訳ないだろ。大体誰が助けを呼びに行けるって言うんだ？俺達に出来る事は、あいつらが飽きて居なくなるまで待つ事だけなんだよ」

こういう時、無力な者達は救世主の登場を望む。自分達の代わりに戦い、自分達を助けてくれる守護神がどこかに居ないか、必死になって思いをめぐらす。はたから見れば滑稽で身勝手でも、人間は本能的にそうせずには居られない。

「じゃ、じゃああいつはどうだ!?グンターなら、きつと……」

「そうだ！冒険者ならサキュバスだって倒せるかも……結構強いんだろ？」

「わかるもんかつ、自分で言っただけだ。でもあいつがサキュバス達を退治してくれることを祈ることしか俺達にはもう……」

ただ、メンホーフ村にも戦える者が居ない訳ではなかった。グンターと言うこの村出身の青年冒険者が、先日から里帰りで滞在していた。ゆえに戦えない村人たちは誰もがこう思った。ひよつとしたら、いや、きつと……と故郷の期待を一身に背負ったグンターが、その時何をしていたかと言うと。

（やはりな……あいつら、何かを探していやがる。手あたり次第に人間を襲っているだけじゃねえ……！常に動き続けないと、すぐにみつかる！）

彼は孤独に戦っていた。サキュバス達が去るまで隠れ続けるのは下策だと判断し、サキュバス達を観察しながら慎重に移動し続けていた。

グンターの冒険者としての力量は、一言で言うならそれなりである。竜殺しの名声を得られ



そんな英雄の卵ではないが、雑魚モンスターの倒し方すら知らない食い詰め者くずれでもない。時にはキャラバンの護衛に参加したり、時にはそこそこのモンスターを狩ったり、時には小き目の遺跡を荒らしたりする、どこにでも居るそれなりの冒険者である。

(くそつ、あつちにも居やがるか！しかも4匹も……あつちは駄目だ。なら……)

彼は今までの経験を総動員し、知恵を絞り、くじけそうになる心を叱咤しながら動いていた。時には壁に背を預けながら角の先の様子を伺い、時には茂みの中を這って通り、時には樽の後ろで屈んで身を隠し、時にはサキュバスの後ろを忍び足で通り過ぎ、神経をすり減らしつつも諦めなかった。

(後はあそこだ！あそこさえ通り過ぎれば……いや、待て、落ち着け。これが最後なんだ、こういう時こそ慎重に、あと一回だけ全ての方向を確認するんだ……)

彼の努力は報われた。単独行動の強みを活かしきり、最後までサキュバス達に見つからずに村の裏口にたどり着いた。そしてそこでも急ぎたがる心を抑えつけ、絶対に発見されない事を確信してから動き出し。

(やった……！やったぞっ!!)

ついに村から脱出する事に成功した。

(俺はやったんだ……！これで死なないで済むぜ！ざまあみろ、サキュバス共め！)

無論それは村の外に助けを呼びに行く為というのは二の次で、第一には自分一人だけ助かる為の行動だった。

メンホーフ村からは、最寄りの別の村や町まで徒歩で数時間かかる。つまり例えすぐに助けを連れて戻ってもそれは半日後で、サキュバス達がみつげられた村人全てを食い散らかした後になるだろう。

そもそもこの規模のサキュバス達の襲撃に対処するのなら、どこかの軍を動かすか、もしくは腕利きの冒険者パーティが必要である。あくまでもそれなりの冒険者でしかないグンターに、軍を動かすコネも格上の冒険者を雇う金もない。

(……仕方ねえだろ)

客観的に見れば、グンターの行動は理にかなったものだった。しかしグンターは理屈で感情を圧倒できる人物ではなかった。生存してみせた安堵と達成感が重苦しい後ろめたさに変わるのに時間はかからなかった。

(俺一人で戦ったって、絶対やられるだけだった。せめて他の村や町が同じ目に会わない様にするだけでも正しいはずだ。村の為に無駄死にしたって、無意味だ……)

メンホーフ村の平和で退屈な生活を嫌い冒険者になったグンターでも、極限状態を脱した今では罪悪感を覚えずには居られなかった。善人になるには当然努力が必要だが、悪人もまた簡単にになれるものではない。

善人にも悪人にもなれなかった中途半端さが彼の不幸であり、命取りとなった。

「ふわあゝあ、退屈うゝ」

「!?」

もう一生見たくなかったサキュバスの姿と声が、彼の前方にあった。仕方がないと自分に言い聞かせるのに必死だったせいで、グンターはそれに気付くのに遅れた。咄嗟に隠れ場所を探しても、あまり大きくない木の影に隠れるのがやっとだった。

（バカな……なんでまだサキュバスが居やがる!?しかも……ざつと10匹は居るじゃねえか！  
なんでこんなに……!）

「まったく、お母さん達ばかり美味しい思いして。何が誰か逃げた時の為に村を囲んでいなさい、よ。あれだけ沢山で行ったのに、逃げ出せる奴なんて居る訳ないじゃん！」

「例え居たとしても、きつとロクなのは来ないよね。若くて元気な男は他の人間を守ろうとするだろうし、村に行ったお姉さん達が見逃すはずないもんね」

「うんうん。来るとしたら、家族も居ない様なでぶ親父とかしわくちやなジジイとかじゃない

かな？それかお母さん達でも勝てないくらい強い。ま、どうやっても私達に良いのは回ってこないよね〜」

村の外に居たのは、10人ほどのサキュバス達だった。ただ、村を襲ったサキュバス達に比べると明らかに未熟な者達ばかりで、まだ胸も尻も膨らみはじめたばかりの少女のサキュバス達だった。

（畜生、なんだってこんなへんぴな村の為にそこまで頭数を揃えやがったんだ！しかも一人も逃がす気はないみたいだな。俺たちが何をしたってんだよ！）

怒りを抑えて生き延びるためにどうすればよいかを冷静に考える。

（雑魚があれくらいなら何とかなるか？いや、無理だな一気に全部は倒せない。一人でも逃せば村に増援を呼ばれてジ・エンドだ。気付かれないようにここを抜けるしかない……気付くな……！もつと良い隠れ場所は……！）

村を出た事で油断した事を悔やみ、再び全身全霊を隠密と逃亡に使おうとする。だがその時

はもう遅すぎた。

「ん？あれれ……？ねえ、なんか男の匂いしない？」

「あ、本当だ！どこ？どこ？」

「……あそこだよ！あの木の裏！」

（く、くそつ、なんてこつた……！こうなったら……！）

隠れ場所が悪かったか、それとも餌にありつけなかった少女サキュバス達の感覚が鋭敏になっていたのか、グンターはあっさりと言見されてしまった。それでも彼は村から抜け出した集中力をもう一度発揮し、この状況の最善手を探した。

「どけ、雑魚ども！俺を邪魔しやがるなら切り捨てるぞ！」

ここでグンターはジャキン、と乾いた金属音を立てつつ剣を抜き、声高に脅かした。一対十

では勝てる自信はないが、負けてもやられる前に何体か仕留められる程度の実力差はあると判断し、少女サキユバス達が死を恐れて引き下がる事に期待する。それが彼の選んだ手段だった。

「あ、あれ？ちゃんと武装してるよ、あいつ……」

「でも、一人だけだよ？勝てるんじゃない？」

「いや、あれ結構強そう……お母さん達呼んだ方が……」

「えー！多分あれこの村一番の当たりだよ！お母さん達に取られちゃうよお！」

「だからって、危ないよお……それにフレリア様言ってたよね。一人も逃がすなって……お母さん達呼んだほうが」

「えーっ!?勝てる勝てるあんなの！レベルアップのチャンスじゃん」

(……なんだよ、もつと怯えろよ！怯えて全員で助けを呼びに行ってくれよ)

残念ながら、サキュバス達はグンターが望む程怯えてくれなかった。何人かは動揺し戦闘をためらったものの、全体で見れば危険を覚悟で戦うべきだと言う意見の方が多い。

（奇襲で仕留めれば逃げ出すか……？いや、『敵討ちだーっ』てなるかも知れねえ。そうなたら……確かサキュバスの吐息は誘惑だけじゃなく、相手を麻痺させる事も出来るはず。長期戦に持ち込まれたら戦っているうちに徐々に身体に蓄積していくかも知れねーし、仮に有利になっても体力を残しとかねーと村のサキュバス達を呼びに行かれたらアウト。とにかくここに居ると時間が経つだけどんどん不利になっていく……ええい、こうなったら脚で勝負だ！）

このままでは恐らく、戦いは避けられない。そう判断したグンターは彼女達が迷うのをやめる前に走り出した。

「あゝっ！逃げた！逃げた！」

「ダメ、逃がしちゃダメ！追っかけるよ！」



「逃げたんなら、きつと見かけ程強くないよ〜！」

（やっぱり追いかけてくるのかよ！引き離せるか……!?!）

サキュバス達はやはり見逃してくれず、全員で彼の後を追って走り出す。グンターは自分よりも足が速い者が居そうか確認しつつ全力疾走する事を強いられた。

「待て待て〜！大人しくしろ〜！」

「私なら追いつける！観念しなさい！」

（チイツ！俺より速いのが混じってるのかよ！）

幼く見えても既に飛行することが出来る者が半分ほどいて段々と距離を縮めて来る。既に死にももの狂いで脚を動かしているグンターはこれ以上速く走る事など出来ない。何か足止めに使える物はなかったか、と自分の荷物の中身を思い返しても使えそうな物はない。

(それなら……!)

「よし、つかまえ……うわあっ!」

次にグンターが取った手段は、飛行速度の速いサキュバスが追いつきそうなタイミングで振り向きざまに剣で切り払う事だった。

(畜生、避けやがったか!)

「あ、あつぶな……よくもやってくれたわね!」

だが刃は間一髪の所でかわされ、グンターが得られた成果は少女サキュバスをわずかな間だけ足止めた事だけだった。舌打ちと共に再び走りながらも、グンターは次のチャンスを伺う。何度もやっていればその内当たるはずなのだから。

「皆、これ以上近づいちゃダメだよ!」

(あのがき……！)

「分かつてるって。流石に切られるのは嫌だしね」

しかし少女サキユバス達はここでも彼の望む行動を取らなかった。飛行できるサキユバス達は足並みを揃え、一定の距離を保ちながら彼を追い続けた。剣の間合いの外で安全に追跡し、グンターのスタミナ切れを待つつもりなのは火を見るよりも明らかだった。

(くそつたれ！ここから最寄りの村まで持つか……？いや、持つ訳ねえ！)

焦りと恐怖の海の中、グンターは必死に頭を働かせた。だがそれは彼の絶望を一層深める結果にしかならなかった。

このまま全速力で走り続けられるのは精々数分。その間に最寄りの村にたどり着ける訳がない。つまり少女サキユバス達と彼のどちらが先に走れなくなるかの勝負になるが、メンホーフ村から脱出した時点で消耗していたのだから勝ち目はかなり薄い。武装や荷物のせいで走り難い事も考えれば尚更である。

(逃げられねえ……なら、やるしかねえ！)

グンターは覚悟を決め、怯えたがる膝に喝を入れながら走るのを止め、再び剣を抜きながら振り向いた。

「しつこい雑魚どもだな！……そんなに死にたいなら、死にたい奴だけ来い！望み通りにしてやるぜ！」

息が荒くなっていたせいでやや間延びしてしまっただが、グンターはそれでも精一杯の怒気を込めて少女サキユバス達を挑発した。その甲斐あって彼女達は再び足を止め、互いに目を合わせて様子見をし始める。

「あいつ、やるってさ……」

「どうしよう？ いっせーのーせ、で飛びかかる？」

「でも、固まって行ったら誰かは必ずやられるよ？」

「あのさ……相談なら、あいつに聞こえない様に……」

(よしよし、ビビれビビれ……)

この反応こそ、グンターの望んでいた物だった。さつきと違い、村から引き離れた今なら大人サキュバスに聞きつけられる心配はない。後はどうにか上手く少女サキュバス達の恐怖をあり、死にたくない村に助けを呼びに行っている内に逃げ切ってしまうれば生き残れる。その為には一匹殺してしまうのが一番だ。

「……任せて……あのね……」

「ああ……ならいけそう……頑張つてね」

「その代り……私が一番にいただくからね」

「おっけーおっけー」

（怯えろ、もっと怯えろ……！）

少女サキュバス達が小声で相談している時間も無駄にせず、息を整えながら脚を休ませる。どう転んでも状況は自分に有利な方向に進んでいるとグンターは確信していた。

「じゃあ私が相手するね！お兄さん」

（しめた！一匹だけか！なんか策があるんだろうが集団で襲われるより断然いい。そりゃ奴らだって「先頭が犠牲になって」なんて覚悟ないだろうな）

前に気出てきたのは逃げる彼にもっとも近づいた、一番飛行速度の速い一人だった。他の者達より少しだけ大人びている彼女が危険な役目を押し付けられたのだろうか。グンターは少しだけ哀れみを覚えつつも、一度に複数を相手にせずに済んだ幸運を喜んだ。これを倒せば他のはあきらめるだろう。

「良いだろう。覚悟しやがれ！」

改めて剣を構え、相手に気合をぶつける。モンスターと戦う時には気圧されてはならないと言う基本にグンターは従ったが、対する出てきたサキユバスが取ったのは、基本とは程遠い行動だった。

「そんなに怒鳴らないでよ。良い物見せてあげるからさあ」

「なっ！」

するり、と布きれが落ちていく。元々半裸以上全裸未満の格好をしていた彼女は、かろうじて乳首と性器を隠していた布を躊躇なく脱ぎ捨て、全裸になった。

「ほら、どう？私の身体、気に入った？」

控えめに膨らんだ白い乳房の頂点を彩る、鮮やかなピンク色の乳首がぷるんと揺れる。それに負けない程綺麗な紅色の性器は未熟ながらサキユバスらしくしつかりと濡れており、愛液に

よる光沢をアピールしていた。

（なっ……何を……いや、当たり前だ！）

グンターは一瞬見惚れつつ、少女サキュバスがなぜ脱いだのかを理解できなかった。だが彼女の頭はまだちゃんと働いており、三秒と経たずに彼女の意図を見抜いてくれた。

（まともにやったら勝てねえんだから、誘惑して弱らせる。サキュバスの常套手段じゃねえか）

言うまでもなく、サキュバスは魅了の力が最大の武器である。身体能力や魔力そのものならもつと優れている魔物はいくらでも居る。それにも関わらずサキュバスが恐れられるのは、相手を弱体化もしくは無力化する事に長けているからだ。

（さっさと片付ける！）

長引けば長引く程、つまりこの裸体を見れば見る程、自分は魅了されていく。逆に言えば、魅了されない内に相手を倒してしまえば良い。グンターは彼らしく論理的に考え、駆け寄って



剣を振るった。

「おっと……はずれー」

（クツ、もう一回！）

少女のサキュバスはグンターの想定よりも遥かに余裕で攻撃を回避し続けた。

「ぜーんぜん当たらないよ……ねえそれよりもっと良く見てよ。良いでしょ？私のカ・ラ・ダ」

「誰が見るか！」

グンターは魅了されないようにサキュバスの身体をなるべく見ない様にしていた。そんな事をしていれば相手の動きを読めないのは当然であるが、仲間がいない以上魅了されれば負け確定である。逆に魅了されなければ戦闘力においては間違いないと踏んだグンターの《魅了されないことを最優先にする》グンターなりの戦法だった。

(クソッ！当たらねえ……！)

しかし、グンターの剣は空を切り続けた。サキュバスの方は最初からグンターに攻撃などせず、回避だけに集中していた。彼女の方はグンターの様子を思う存分観察できるのだから、避けやすくなるのもまた当然だ。

「当たる訳ないじゃくん？そんなに目をそらしているんじゃないさ」

「ぐっ……！」

(このクソガキが……！しかし、避けてばかりだ。ほかのサキュバス達が何もして来ないのを見ると、素早いこいつが時間稼いでいる間に何かするつもりか。大人を呼んでくるか。それとも……いずれにしても時間をかけていい事はない。良いだろう、見てやる！見て……うつ)

このままではちが明かないとグンターは覚悟し、正面のサキュバスを真つ向から見据えた。途端にしゃぶりつきたくなる蕾のような乳首、未成熟なツルツルのワレメが見えてしまう。ズ

ボンの中でペニスがずくんとうずき、勝手に膨れ上がってしまう。

「やっと見てくれたね。どう？私の身体、好き？」

「へっ！お前みたいなガキはお断りだ！」

自分が発情し始めたのを自覚し、それを虚勢で誤魔化しながらグンターは再び剣を振るったが、それでも攻撃範囲ギリギリのところにいるサキュバスの身体にカスリもしなかった。

「本当に？分かるよ？勃起しているの」

「う、うるせえ！俺はロリコンじゃねえ！」

避ける度に揺れる小ぶりな膨らみが、機敏に動く柔らかそうな肌が、どうしても目に入ってしまう。一回空振りをする度に少女サキュバスは余裕を見せ、グンターは焦りを隠せなくなる。

「そうなの？じゃあすぐロリコンになっちゃうね」

パチツとしたウインクに『可愛い』と広がる心の声を、振り払って消し去るように剣をブンブンと夢中で振り回すグンターだが、大振り過ぎて体が剣に振り回され余計に体力がそがれるだけだった。

「くそつ、くそつ……逃げるなあ……！」

「アーハッハッハ！そんな大振りじゃ当たらないよー」

ほどなくグンターは自分の身体の異常を否定できなくなつた。足を止めて休んだはずの身体は熱く火照り、妙に力が入らなくて言う事を聞かない。息は犬の様に荒くなり、ペニスは今すぐにしごきたくなる程固くなっている。

（俺は……どうなつちまつたんだ……）

一度身体の異常を自覚すると、今度は頭も思う様に働かない事に気付いてしまう。どこか心地良いぼうつとした熱が頭に広がっていて、考えるスピードが明らかに落ちている。今までの

様に現状を分析し、取り得る手段を並べ、最適解を選ぶ事が出来ない。

「そろそろ辛くなってきたでしょ。もう休も？ね？」

（なんでだ……なんでこんなに急に……）

泥の様に重くなった頭の中でグンターはそれでも考えた。いくらなんでもサキュバスの裸を見ただけで、こんなに速いペースで魅了されるのはおかしいはず。さっきまで平気だったのに、こんな状態になるのはおかしいはず。

魅了は基本的に油断している間に使う技で、戦闘中には同レベルでもまず成功しない。そんなに簡単に成功したら最強のスキルになってしまう。ましてこいつは明らかに格下。

だが、そのおかしい根拠も思う様に考えられない。もう何をどうしていいか分からない。どんどん重くなる剣を落とさない様にしながら、目の前の少女サキュバスと対峙するのが精一杯だった。今からでも目をそらした方がいいのでは、と言う発想すら思い浮かばなかった。

「ねえねえ……もう無理じゃない？お兄さんじゃ私に勝てないと思うなく。そんなハアハアしていやらしい視線で、私の身体に見惚れちゃってさ、ね？今、降参したらお兄さんがとつても喜んでくれる、凄いイイコトしてあげるけど、どう？」

「ふざけるな！お前が俺に勝てる訳ないだろ、逃げてるだけじゃねーか！」

「じゃあ……攻撃当ててみなよ……ほらほら、『そつちの剣』をここに突き刺しちゃうつていうのもいいよ」

グンターの言葉に対抗するようにサキュバスが後ろ向きに腰を突き出し、フリフリと振って挑発する。更に振り返りながら指を咥え、流し目でウツトリとうるんだ瞳でこつちを見ている。

（このガキ……わからせてやる）

グンターの頭には生意気なサキュバスを押し倒し、自分のペニスでサキュバスを犯し、屈服させ、涙目で謝りながら許しをこうサキュバスの姿が浮かびあがった。

（バカツ！何を考えてるんだ！奴らの仲間もいるんだ……ここは斬り殺す……絶対だ……）

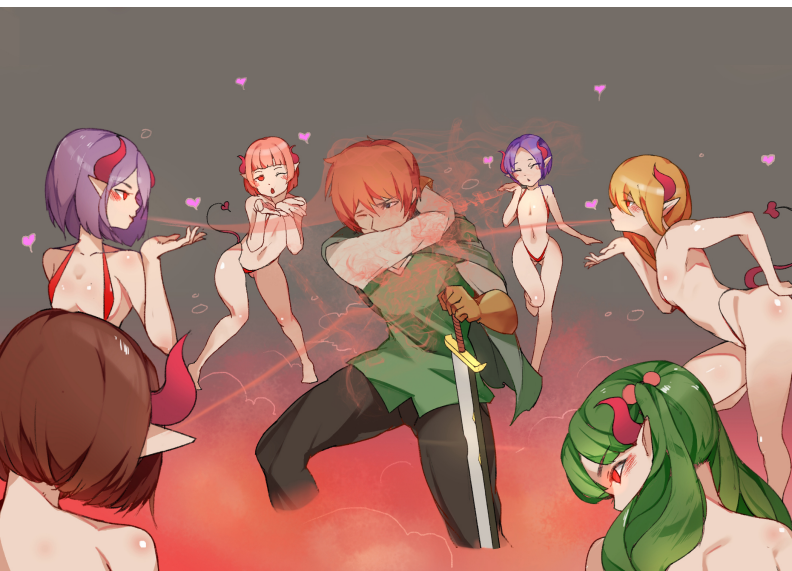
油断たつぷりの隙だらけの格好に斬りかかろうと前に出たとき、鉛の様に重くなっていた体に驚きながら、その重みに耐えられずグンターは前に倒れかけ、そのまま膝をついてしまった。皮肉にも膝で地を打つ痛みがわずかに彼の観察力を取り戻した。

「ふううくく……」

「すううう、ひゅううううう」

「あっ!!」

彼と対峙していた一人以外の、残り九人のサキユバス達は助けを呼びに行つたのでも、グンターの隙について攻撃しようとは伺っているわけでもなく、周りをグルッと囲んでピンク色の魅惑の吐息を吹きかけていたのだ。





一人でやったのなら大した効果はなかったであろうその行為は、九人が四方八方から浴びせた事で知らず知らずの内にグンターの身体を蝕んでいたのだった。サキュバスと対峙したことがなく「魅了」という状態を甘く見ていたグンターの隙。

「くそがつ！卑怯だぞ！」

「あつ！あいつ気付いたよ！」

グンターは今一度気力を振り絞って立ち上がろうとした。

「もう平気だよ、ほら見せつけちやおう！」

「見て見てお兄さ〜ん」

「キヤハハハハハ！ハアハアしちやつてるう〜」

だが気づいた時には既に手遅れだった。タネがバレたサキュバス達は腰をくねらせ、悩まし

げな表情で、その危うい性の魅力溢れる小さな身体をみせつけた。

「あ……あつ……」

ずきんと痛い程にペニスが反応し、それに力を全て持つて行かれた様に足が崩れ落ちる。もう少して立ち上がれたはずのグンターは、先程以上に脱力してふらふらと千鳥足になってしまった。

「きゃーっはっは！ かつこわるーい！」

「えー、笑っちゃかわいそうだよ。ずいぶん頑張ったじゃない？」

「手こずらせてくれた、とも言うけどね」

勝利を確信したサキュバス達がグンターの周りに作った円を小さくしていく。

「キス……してもいいんだよぉ」

「ほら、もつと見ていいんだよお。私のカ・ラ・ダ」

「ほら、もつとこつち見て」

「挿<sup>い</sup>入れて欲しいな」

「くっ……や、やめろ！くるなあ！」

「もうあきらめなよー！そんな勃起させてさ、これからお兄さんは私達みーんなに犯されるんだよ？どう、嬉しいでしょう？こんなかわいい子達がみんなで寄ってたかって犯してくれるんだよ？」

必死に視界を塞ぐグンターに勝利を確信したサキユバス達の笑い声が四方八方から響き渡る。それでもグンターはまだ諦めなかった。自らの腕の間から覗く身体から目を離せないまま、屈辱を怒りに変えて逆転のチャンスを探した。

（まだだ……まだ剣は持っているんだ……近づいてきやがれ……！）

「これなら相当な力を吸収できそうだよね。一気にたくさん強くなれるかも！」

「実は私達が一番の当たり引いたんじゃない？あんな田舎村にこんなレベル絶対ないっしょ？」

「よおっつし！私がいっちばあ〜ん」

「あっ！ずるい！私が最初って約束したでしょ！」

「早いもん勝ちだよ〜だ！」

（来た！……行ける！）

やがて一人が近づいてきた瞬間、グンターはもう動けないフリをしたまま剣を強く握り。

「あつ！危ないっ！」

「うおおおおおっ!!」

「きやつ!?!」

あらん限りの力を振り絞り、剣を横になぎ払った。

「あつ！……ぶなー……まだ動けたんだ……」

（く、くそおっ！もつと引き付けていれば……!）

「バカツ！まだ完全には魅了されていなかったんだから！大丈夫!?!」

「ちよつと！血が出るよ！」

「えっ……うそ……」

だが悲しい事に、この悪あがきでグンターが得られたのは言われなければ気付けない程度の小さなかすり傷と。

「うわあああゝゝゝん!!痛い、痛いよおおゝゝ!!」

「あー、よしよし。酷いわねー、女の子に傷をつけるなんて」

「優しくしてあげてたのに……もう怒ったぞー」

それを大袈裟に嘆いた彼女達の怒りであった。

「えいっ!」

「このやろ!このやろ!」

一人が石を投げたのを皮切りに、全員が投石を始める。

「女の子を傷物にするなんてサイテー！」

「女の怒りを思い知れ、思い知れ〜！」

「皆もやっちゃえ〜!!」

(こ、このクソアマ共！命がかかっているんだ！斬りかかるに決まっているだろうが)

疲労に吐息の麻痺効果も有るのか、身体を満足に動かす事もままならないグンターは、サキユバス達に斬りかかる事が出来ない。せめて飛んでくる石を必死に防ごうとするが、四方八方から飛んで来る石を全て防ぐ事は出来ずダメージが蓄積していく。

「ぐ……ぐわっ！……くはっ！やつ……やめろ！……痛え」

攻撃が有効だと確認し、調子に乗ったサキユバス達は投石のダメージにうめくグンターの姿を馬鹿にし、笑いながら投石攻撃を続けている。





「キヤー——ハハハハッ」

「だっさ〜！」

「おりや♪！バ〜カッ」

「ぎゃぼおおっ!!」

突如、恐ろしいほどの激痛が彼の神経を支配した。何が起きたか分からないままグンターは崩れ落ちざるを得ず、額を地面にこすりつけ目を閉じた。

「イエーイ♪命中う〜」

「ギヤハハ！大きくしてるのが悪いんだぞ〜！」

狙ってか狙わずか、石の一つが彼の股間を直撃した。それがこの激痛の正体だと気付いたグ

ンターはひたすら悶絶する事しか出来なかった。

「い、いてえ……い、てええ……」

それは控えめに言っただけで地獄だった。興奮させられた身体は激痛の影響を受けず、ペニスは射精欲でいきり立っているままだったのだ。それが更に痛みを長引かせ、グンターは両手で股間を抑えて転がりまわる。転がりながら、恐る恐る近付いて来たサキュバスの1人が地面に落ちたグンターの剣を拾おうとしているのを目にした。

「おーこれはなかなかいい剣だね。でも危ないから向こうに置いてこうね♪」

片手で股間を抑えつつ手を伸ばすが届かず、サキュバスの手に剣が渡ってしまった。サキュバスはそのまま品定めするように剣を見上げながら遠くに持って行ってしまおう。剣を奪われたことで敗北を確信したグンターに死の恐怖が訪れる。

「あ……あああ……！わ、悪かった……！ほ、欲しいものはやるから……い、命だけは助けてくれ」

「アハハ！なに？怖いのか？私達が」

「くふふ……」

「いっつぱい遊んであげる」

弱気を見せたグンターにサキユバス達はワキワキと両手を開いたり閉じたりしながら、囲んだ円を小さくしていく。

「や、やめろっ！やめてくれっ！」

視界が肌色に覆われていきハアハアと息を荒げながら抵抗するグンターの前後左右から、二十本の腕がよつてたかつて服を引っ張りビリビリと引き裂いていく。

「やっ！やめろーッ」

「キヤーハハハハ！」

あつという間に身体を覆い隠すものは何もなくなってしまった。守ってくれるものが何も無いその頼りなさにグンターはさらに心細く弱気になり、内股でペタンと座り込んでしまう。

「あ、ああ……あの……経験値一杯稼ぐから、一杯吸っていいから……生かした方が……」

「クスツ……じゃあ隠さないで手をこうやって後ろにして」

「は……はいっ！へへ……」

助かるかも知れない。慈悲をかけて貰えるかも知れない。それだけを胸にグンターは自分の無力さと差し迫った死に耐えられず、プライドを投げ捨てて、おそらく年下で実力も下のサキュバス達の言われた通りにして愛想笑いを浮かべた。『死にたくない、生きてさえいれば何とかなる』そう思えば何でも出来た。

（あ？）

突然グンターの後ろに回した両手の手首がくっついて離れなくなってしまった。手枷のようなものだろうが、未知の感触でがっちりとは両手首がくっついて一ミリも動かすことが出来ない。

「やったー！捕まえたよ!!」

「約束通り私が一番だからね」

グンターの目の前で周りのサキユバス達を威嚇しているのは最初に戦った一番足の速いサキユバスだった。そのまま膝立ちのグンターに近づき、同じ高さにある顔同士を近づける。

「んふふふ、どうしたの？最初の威勢は？ほら、戦わなくていいの？」

「ご……ごめん……さつきは悪かった……た……た……た……た……助け……」

「本当に悪いと思ってる？なら、キスして？」

目の前で悩まし気に目をつぶったサキュバスが突き出した、ピンクの柔らかそうな唇があやしく艶めいている。

(うっ……だ……駄目……でも……こうなったら、サキュバスの機嫌を損ねないほうがいい。

絶対服従のふりして死なない程度に吸わせればいいんだ)

頭の中で言い訳をしながら、自ら唇同士を重ねる。

「ちゅっ」

「んっ……ふううんん……！」

重ねた唇から、あのピンクの吐息が直接吹き込まれてくると、甘美な刺激に黒目が上がっていき、幸せな感情に包まれる。離れられない。離れたくない。

「ふふっ……本当のキスはこうだよ……ん……あ……レロ、んああん、むむうん……」

ぬちや、くちや、ぬちゆう

小さく柔らかい舌が唇の間を割って侵入してくる。グンターの舌を絡め取り、うねうねとまるで淫らな触手のようにのたうちながら口の中全体を犯し続ける。さらに、生温かく甘い蜜のような唾液が、飲み込んでも飲み込んでも口の中にどンドン注ぎ込まれてくる。

(ああ……おいしい……味も香りもジーンと痺れてしまうほど甘くて……あれ？サキユバスの唾液って……)

それ以上思考をめぐらすのは不可能だった。この柔らかくかわいらしい舌を拒絶する事なんかできない。

「んん……はあはあ……んむっ、はああ……んんん、んああん、むむううん……！」

どのくらいそうしていただろうか。

「ぶはあく♪んふふっ、どうだった？私のキス」

「あ……ふへあ……」

グンターの顔は蕩けきっており、だらしなく開いた口からは唾液がポトポトと滴り落ちていた。

「もうトロトロじゃん！バーカ！フフフツ」

「キヤハハハ！おーいお兄さん、聞こえてますかあー？」

「もうミトの事しか見えてないんじゃない？」

「クスツ……こうなつちやえばもう大丈夫だね……ふふ……やっぱり私達って強い」

（ミトっていうのか……この子……）

「ミトちゃん……ミトちゃん……」



「ん？なーに？」

「あ……ああ……ミトちゃん」

「なーんですか？クストツ」

うわ言のようにサキュバスの名を呼ぶグンターに顔を近づけて、首をかしげながら上目遣いで覗き込む自信たっぷりのミト。あざとくも可愛らしい仕草に、グンターはズキユーンと心臓が矢で打たれたように速くなる。

「ああああミトちゃん！」

「お兄さん……好きだよ……だあ……いい好き。ふふつ……じゃあ、そろそろ貰っちゃっていい？お兄さんの精」

可愛らしい顔に、欲望を露わにした黒い笑みを浮かべ、舌舐めずりしているミトを見つめる

グンターの顔には、明らかに期待の表情が見て取れる。

「ああ……それって……」

「凄く気持ち良いコトだよ……」

グンターはコクリと頷いた。

「あくあ、レベル差のあるはずのサキュバスに負けちゃったね。クスクス……」

（ああ……このままミトちゃんに襲われて精を搾り取られちゃうんだ。ほかのサキュバス達にも何度も何度も犯されまくるんだ。でも……俺は……）

仰向けに寝かされたグンターは、自分の身体をまたがって立つミトがくぱあと拵けて見せつけるピンクの空間。天国への入口のその肉洞が、ゆつくりと喜ぶようにビクビク震えるペニスに迫り来るのをただ見つめている事しかできなかった。

ぴちゅ

「あつ……」

むにゅ……ぬりゅ……ぬりゅ……

ペニスが温かく、柔らかく、肉洞に飲み込まれていく。ぬるぬるの蜜を潤滑液に小さめで密着感、一体感のある感触にグンターは思わず息を漏らし、天を仰いだ。

「どう？気持ちいいでしょ？」

全体を温かい肉襪に包まれたかとおもうと今後はその襪が前後に動いて潤滑液を塗り付けながら刺激を与えてくる。まさに快楽を与えるための器官に動き、グンターはあつという間に達してしまいそうになる

ずにゅ……ずにゅ……

「ふんぐつ……んっ……」

「ふふ……」

しかし、ミトはピタリと動きを止めゆつくりとした動きに変える。それでもイってしまおうかと思つたグンターだったが、ミトは限界を確かめているのかグンターが達する事はなかった。

「ちよつと早くしてよー」

「駄目駄目！今出しても一回分でしょ、寸止めして一杯追い詰めてからならいゝつばい出せるんだから」

「ずるいぞー!!」

「時間制にしろー!」

「ふふふ……射精するまでつて約束だもん。ねー？お兄さん。お兄さんも私ともつと楽しみた

いでしょ?」

「あつ……ミト……ちゃん!あひつ!ひゃあああああ!」

襲い来る周りのサキュバスの苦情を無視して二人だけの世界に入ろうとするミトだったが周りのサキュバス達はそれを許さず、各々グンターを早く射精させ順番を回そうと快楽を与え始める。

「ほっ!おっ!おっおほほっ!ひいいひいいいっ」

両耳に舌が侵入してくる。乳首を弾かれ、抓られ、舌でその周りのクルクルと舐められる。尻穴からサキュバスの尻尾が侵入してくる。両手両足の指の間まで舐められる。

全身を大量のすべすべぶにぶにの肌に摺り寄せられる。それはまるで、全身がペニスになり10人のサキュバス達によって作られた巨大なヴァギナに、飲み込まれ、もみくちゃにされているようだった。



「ほらほら！イっちゃえイっちゃえ」

「イケ！早くイケ！」

「駄目だよ！まだイっちゃ。もつといっぱい溜めて溜めて」

グンターの意思など介入しない。ミトと9人の闘いは10分にも及び、その頃にはグンターは理性が完全に吹き飛び、獣のように喚き散らしていた

「くっ……狂うぞうぞう！ぐううっ！おっ！おっ！だいたいいいい！だしいよおおおおお  
おっ」

（射精したい射精したい射精したい射精したい射精したい射精したい射精したい射精したい）

「ふはは！お兄さんの顔おかしーい♪オアズケされまくっておかしくなっちゃったね♪」

「破裂しちゃう！ミトちゃん！お願いですっ射精させてっ！射精させてえええ！お願い！ミト

+LVUP+





ちやああああん!!」

「可哀想、そんなに言うならいいよお兄さん思いつきりイかせてあげる。皆も、もう待ちきれないみたいだしね」

ミトが前後に腰を激しく動かしだすとニユルニユルとペニス全体が肉襞に激しく前後に刺激される

「ほーらほら……どう？私の本気い〜?……つて聞くまでもないか」

「あつ……あつ!あーッ!イクツ!!イクイクイクイクイクツクウーッ!!」

爆発寸前だったペニスはあつという間に噴火する。

ぶびゅーっ!ぶびびっ!びびっ!び!びゅぶびゅびゅびゅびゅびゅ~~~~~っ!

「あはっ!凄い勢いで当たって来てるううう!」